

# 私達の提言

- \*\*\*\*\*
- A. 子どものために
1. 学童保育・子ども会の活動の場
  2. 短期間の子どもの保護・宿泊施設・教育相談室
  3. 近隣の学校の教職員・子どもの活動の場 — とすること
- B. 地域住民・労働者のために
- Aの要求実現と関連して、その延長線上に必要な社会教育の場とすること。
- \*\*\*\*\*

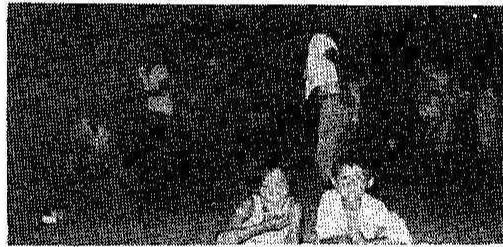
釜ヶ崎に生れ、育つ子どもたち、青年たちの上には、様々な困難が覆いかぶさっている。例えば、あそび場の保障にしても、学習の場の保障にしても、健康の保障にしても、青年の成長の保障にしても、親子個人で解決出来る問題ではない。

## 広場であそび集団を

実態調査でも証明されたように、釜ヶ崎の子どもたちには、自分の家の中に自分の場がない。しかたなく、長時間戸外で遊ぶことになる。(8時間以上も戸外で遊ぶ子は40%)。しかし、その戸外が、やはり同じように自分の場がない多くの労働者のいこいの場、生活の場として利用されている。その大人たちの中で、子どもたちは遊ぶ。

- 野球をする、球が寝ているおじさんの頭に当たった。みんなとんでいってあやまる。みんながあやまるから、おじさんもニコニコ許してくれる。でも時々、怒られ、なぐられることもある。
- 金網を乗り越えて、公園に侵入して遊ぶ。
- おじさんにこづかいをねだり、ゲームセンターで時の経つのを待つ。

— こども会に顔を出す。しかしどの施設も土のある広い場所はない。狭い部屋の中で、エネルギーを発散させ、動き遊びまくる。部屋の中で野球をする。サッカーをする。幼児の顔面に球が当たってしまった。ごめん。



現存する子ども会にとって、かつて、あいりん小中学校が「土のある学校」・新今宮小中学校として再生したように、広い土のある場が必要である。そして、子どもの成長をと考え行われている諸活動を充実していくために、その場と人材が必要である。これらを通して、バラバラにされている子ども会が連帯し、子どもたちが、幼児から青年までたて割りのあそび集団を生み出していくことの手助けが出来る。

## 食を軸に生活習慣を

釜ヶ崎の子どもたちには、自分の家に自分の場がない。だから勉強する場がない。勉強が好

きなならどんな狭い所でもどんな場でも出来ると一般的には言われる。しかし勉強するには、それなりの心の落ち着きが必要である。

- おやじは今日も帰りが遅い。朝は早よう出ていくし、さびしいな。外であそぼ。
- 母さんは、今日も朝方帰って来た。こわくて寝むれやしない。学校へ行く時間にはぐっすり寝てる。
- なんで酒飲んだら、あんなにぐちるんかいな。勉強どころやないわい。あした、どないなるやろ。

釜ヶ崎の子どもたち、及びその周辺の子どもたちにとって家庭の団らんを持つことは難しい。

- いつも誰かが家におらん。
- 今日帰りが遅いらしい。机の上に500円おいてある。〇〇食堂で一人で食べるか、友だち誘って食べよ。
- 今日は、ゲームに使おうてしもうた。腹へったなあ。
- 500円か。ゲームしておかし食うたらもうええわ。

調査結果に見られるように、家族と共に食事の出来ない子が22%、一人や友だちと外食する子が239名の内52名、その内釜ヶ崎地区の子どもが21%もいる。共働きの家庭、父子・母子家庭の子どもたちは、こづかいをわたされ、その中から自分で食事をする。

学童保育は保育に欠ける児童を預かる場である。保育に欠けるのであるから、親がわりのあるいるなこと、「ただいま」から「おやすみ」までを受け持つことになる。あそぶこと、勉強すること、食べること、教育以前のことに関わっていかねばならない。特に、成長期にある子どもの健康維持の面から見ても、例えば、会員制の給食制度等を取り入れ、その場が必要であ

る。一人、或いは友だちと外食しなくても、そんな仲間が集まって、みんなでごはんを用意し、みんなで食べられる場が必要なのである。

又、釜ヶ崎の子どもたちの寝る時間は11時~12時と遅い。これも親の生活に起因するもので、食事のあと、親の帰りを、ゲームセンターや路上でなく、みんなと待ち、ワイワイガヤガヤ宿題でもしようという様ないこの場が、ぜひ必要である。

## 青年に「若衆宿」を

家に自分の場のない釜ヶ崎の青年たちには、いき場がない。

- 今日面接いったけど、ことわられたワ。
- 今日、寝ぼうしてしもうた。もう行きにくいワ。どないしょ、大阪城公園でもいって、ぶっとばそうぜ。
- 仕事せなあかんことはわかってるんやけど、その気が湧いてこんねんから、しゃーないワ。今日、うっとうしかったぜ、おっさん、いやみたらたらいよんねん、あないせ、こないせ、いっぺんに出来るかいいうねん。
- 職場のおばはん、なんかオレに恨みあんのとちがうかな、えげつないで、いびり方が。仕事いやになってくるワ。
- オイ、ええカセット、手に入ったで。みんなで聞こうや。
- どこでやねん。
- まあ、明日も頑張ろ。気合や、気合いでいくんや。

アンケート結果を見てもわかるように、青年たちは明け方近く迄、遊んでいる。中学を卒業して、学校に行かず働いている。働かざるを得ない青年、働く意欲はあっても働けない青年にとって、彼等が集まり、悩みを話し合い、ぐち

を言い合い、なぐさめ合い、励まし合い、そして人生を語り合う場、例えば「若衆宿」がぜひ必要である。

## 差別に負けない子どもを

釜ヶ崎に住んでいる子どもたちは、西成・釜ヶ崎に住んでいるというだけの理由で、社会的遍見と差別を受けている。そして、同じように社会的遍見と差別を受けていると共に、同じ地区に住んでいる日雇労働者のことを知らない。知らないから、野宿せざるを得ない。酒を飲まずにいられないおじさんたちを、なまけものとバカにする。同じように困りの人も、釜ヶ崎のことを、そして日雇労働者のことを、その社会構造や産業構造を知らないで、バカにしている。そして、そこに一緒にいる子どもたちも差別している。

— 今日、面接に行って、西成に住んでる言うたらことわられたワ。

— 私、恥かしくて、職場の人に西成に住んでいるてよう言わんねん。

青年たちのこの言葉を耳にして、差別に負けず、一回限りの自分の人生を大切に歩んでほしいと願わずにはおれない。

— 「中学生、野宿労働者を襲う」

釜ヶ崎に住んでいる子どもと青年たち、そして、釜ヶ崎の周辺に住んでいる子ども・青年と大人たちに、本当のこと、事実を知らせること、社会構造や産業構造を知らせる本当の学習の場が、いま必要である。これらは、とりもなおさず、自分自身の解放となるからである。そしてこのこと、自分自身の解放＝自己実現＝人間形成は、こども会の、学童保育の、若衆宿の最終目的だからである。

## 野宿の親子に援助を

わずか1日の調査であったが、次のような事例があった。

岸和田市に住む中学1年生。8月18日、午後6時頃、西成労働福祉センター付近で出会う。事情を聞くと父親と2人で家出。幾日も家に帰っていない。野宿をしている。父親に何か不都合なことがあり、子どもを連れて釜ヶ崎に来る。以来、野宿生活。本人（子ども）は、家へ帰りたいがお金が無いと言う。聞きとりにあたった人が、相談の末、電車賃を渡した。

夏休み中の出来事であったが、釜ヶ崎ではこの種の出来事は日常的に起っている。

子どもに関する相談は、現在、大阪市中央児童相談所の相談者が、あいりん地区担当として特別に取りあついている。もちろん、西成区一般とは区別している。

また、今宮中学校を拠点にして地域の教育相談にあたる学校ケースワーカーもいる。学校ケースワーカーの主たる仕事は、不就学児の就学指導であるが、子どもの就学にとって生活条件をととのえることは、不可欠の事柄である。逆に、生活環境がととのわないと、就学もむつかしい。

ここ釜ヶ崎では、子どもの不就学を解決しようとすれば、親たちの生活問題を解決しなければならない。特に、家出した親子にとって、住居が落ち着くまでの短期の宿泊施設は、何よりも優先されなければならない。

## 生活・就学総合相談所を

生活センターでは、児童相談所ケースワーカーと学校ケースワーカー、あるいは福祉事務所

のケースワーカーの総合されたような働きが、何よりも必要である。

18日の中学1年生の事例は、その必然性を典型的に物語ってはいないか。また、気軽に相談できる場所も必要である。具体的にいって、現在の釜ヶ崎では労働者が相談に行く市立更生相談所はあっても、子どもの件で相談に行く場所は、地域的にはないと言えよう。子どもの生活と就学全般について、相談できる人と場所が是非とも必要である。

## 社会・世代との交流の場を

釜ヶ崎における子どもと大人（労働者）との関係は良きにつけ、悪きにつけ、他の地域に比べ、より密接である。公園などで子どもと労働者が一緒に遊んでいる風景は釜ヶ崎ではよく見られる。それが常に良好な関係であれば問題はないが、必ずしもそうではない。日中から公園は、労働者たちでいっぱい、子どもが遊べなかつたりする。また酔った労働者が子どもにちょっかいを出したり、逆に子どもが野宿の労働者に悪戯したり、特に暴行を加えたりする例も決して少なくはない。更に、調査結果にも見られるように、釜ヶ崎の子どもと労働者の関係が金銭・物品を媒介とする功利的関係が濃厚であるということである。このような関係性は釜ヶ崎のような匿名的な社会ではやむをえないことかも知れないが、望ましい姿だとはいえない。このような問題は子どもと労働者を分離すればすむといったことにはならないし、それは問題の回避である。

ではこの様なトラブルが、なぜ生じるのであろうか。釜ヶ崎の子どもは労働者の働いている姿を知らない。子どもたちが日々出会う労働者はアブレ（失業）中であつたり、休養中の労働

者である。

折しもこの調査をまとめている最中、釜ヶ崎の日雇労働者を怒らせ、悲しませる事件がおこった。四天王寺境内で青カン（野宿）をしていた労働者が、あろうことか、エア・ガンを持った少年たちによって襲われ、負傷したのである。

なぜ少年たちは外燈やハトの延長線上に、射撃の対象に、青カンをしている労働者を選んだのであろうか。彼らは、なぜ労働者が青カンを余儀なくされているのか、釜ヶ崎の日雇労働者がどのような仕事をし生活しているのか、まったく知る機会がなく、目前の青カンの事態だけを見て、侮蔑し、襲撃に及んだのであろう。

釜ヶ崎の労働者のことを知らないということについては、釜ヶ崎に生きる子どもたちも同様であることは今回の「子ども調査」が明らかにした。特に子どもたちが青カンを余儀なくされている労働者を見ることによって、あるいは、酔っている労働者との体験を主な情報源として日雇労働者像をつくりあげていることがはっきりした。釜ヶ崎で多数を占める現役労働者との素面でのつき合いが限られていることから、その労働者像は歪んだものにならざるをえないし、なぜ青カンせざるをえないか、なぜ酔いにまかせて子どもたちにまわりつくのかも理解できない状態にある。

このような事態は釜ヶ崎の労働者にとっても、子どもたちにとっても不幸なことだと考える。

なぜならば、他者の存在、生活の背景にあるものを問わず、その表層だけを見て、切り捨て、差別する者は、同時に、自分自身をも切り捨てられ、差別されるという恐怖を持たざるをえないからだ。

いや今の日本の社会のありようからいえば、逆かもしれない。「点数主義」・「偏差値教育」の中で疎外され、切り捨てられているという恐



も同様に学校でも考え、対応していかなければならないのです。

その子の生活権の確保は、父親の自立にかかっています。この親子に、緊急に自立する為の生活の場があることにより、父親は安心して求職活動が出来、就労することが可能になります。そして、子供の生活権と学習権が保障されて行きます。新今宮小中学校の跡地は、この様な子供達にこそ親子の生活の場として解放されるべきです。

この父子と同じ様な事例は、

- 母親蒸発に心痛め、真冬に青カンする父と幼児。
  - 内縁の夫の暴力から逃れ青カンする母と子供達。
  - サラ金から逃れ、路頭に迷う父子・母子・家族。
- 等、他数多くあります。

## I 青少年の生活の場と

### 社会教育の場

もう1つの課題は、釜ヶ崎に住む次の様な青少年の叫びを、大人達がどの様に受け留めそれに答えるかにあります。

- A君は、幼児の時から釜ヶ崎に生活し、実父亡き後、母親の内縁の夫との関係に心傷つき、家出を繰り返した後諸施設で生活。退院後、しばらくして実母の病死に遭遇したことも手伝って、就労する気持ちはあってもその意欲を持つことが出来ずに、仕事を転々と変えては夜遊びをし、友達や大人の知人宅を泊まり歩く苦しい日々を過ごしている。
- B君、C君は、母親が蒸発。父子家庭であ

ったが、実父も死亡。中学を卒業又は施設を出て、A君と同じ状態にある。

- Dさんは、児童期を釜ヶ崎で過ごす。母親の蒸発に会い、父親の仕事の関係上、諸施設へ入所。中学を卒業、就職したが続けられず、住込みで働く父親のもとで共に生活することが困難。故郷である釜ヶ崎に戻って来る。しかし就職出来ずに夜遊び・シンナー・性の問題を抱えながらA君同様の生活を送っている。

- 中学生のE君は、年に数日顔を見せる家出母親と、働く意欲の薄い賭博好きの父親の家庭状況より家出。A君と同じ年代の同じ状態にあるF君と行動を共にしている。

- Gさんは、養母と実母との間で自分の出生の重みに苦しみ、家出同様の生活。中学校には登校しながらも、深い性の問題を抱えA君同様の生活を送っている。

まだまだ数多く事例はつきません。養護施設 教護院・少年院で成長期を過ごしていた彼等が釜ヶ崎に帰って来ても、既存の生活状態に何らの変化も見られません。この地域の中で、自己を発見し、自己を変革していく他ないのです。この見逃すことの出来ない青少年達に必要なのは、社会教育と生活の場の保障です。

### A 青少年の生活の場

青少年は、常に行動によって自己を表現し、ひたむきに生きています。自己を見つめ、自己を発見するこの年代に、自分を見つけれずに置き、苦しみ、さまよい歩いている青少年達の行動を見て、私達大人は深い心の痛みを覚えます。同じ気持ちにある彼等が集まり、全くの自由の中、自由にある自分を使いこなせず、その自由をもて余し、行き場所もなく夜遅く迄、路上や

ゲーム・センターでたむろすることによって、互いの傷をなめ合い、現実から逃避して一時の心の安らぎを求めている青少年達は、その行動を持って「何とかしてくれ、助けてくれ」と叫び、私達大人に挑戦状を叩きつけているのです。その叫びは学童からも聞こえて来ます。新しい世代は次々に生れ、彼等はいずれ次の世代、大人の世界へと進んで行きます。今こそ、私達は彼等の喘ぎ、苦しむ叫びに、何らかの方法を持って答えねばならず、黙って見過ごすことは子供と共に生きる大人として大きな罪悪であるとさえ思われます。

その方法とは、自分を捜し求め見つけられる場、例えば「若衆宿」を提供することです。現状のままでは互いの足を引っ張り合うだけで、助け合いや励まし合う仲間関係は生まれて来ません。共に傷を負う仲間が共に生活し、話し合い、自己を見つめ直し、求め、新しい自分を発見し得る場が必要です。

新しい自分の発見とは、今迄知らなかった自分を見つめることであり、それにはねばり強く非行を克服し、自己の生活を変革し得るような内的エネルギー・新しい力に転化する努力が、彼等自身に生まれて来なければならず、彼等自身によってしか発見し得ないのです。だからこそ「若衆宿」は、大人が面倒を見てやるという姿勢であるのではなく、自由な中で、自分の力で築き上げていかねばなりません。彼等の自主性が最優先され、大人の発想と管理を越えるものでなければなりません。こうして苦しむ中で、自分の力で生活することを彼等が自覚し、こゝが自分の場所と思えた時、その行動と経験を通して彼等は、新しい自分・出来る自分・未来ある自分を発見するのです。まさに誇ることの出来る生き方を求める彼等自身の挑戦です。この「戦い」の真只中にいる青少年達にこそ生活の

場として、新今宮小中学校の跡地を解放するべきです。

### B 社会教育の場

自己との「戦い」の中で青少年には大人の援助が必要です。その戦いを助けるのは大人です。自己発見の為の手立てとして必要と思われる精神的そして物理的手段を用意しなければなりません。

まず、大人自身です。しかも子供を引きつけることの才能を持った有能な大人が必要なのはなく、人のことを信頼し、絶えず新しく生れ変わろうとする大人、相談出来る大人です。

次に、識字学校や夜間学校が必要です。彼等の殆どが学習する意欲を奪われ、損われているからです。文字を使用する文化に生きる人間にとって、その獲得と理解への深まりは、どれ程人の心を豊かにするかは言う迄ありません。そして、その場に自分を生み変えようと努力する大人、労働者の姿は、互いの理解と信頼の上に不可欠なものです。これに付随して、図書館も必要になって来ます。

次に、技術講習の場・作業場が必要です。自分の手を使い、何かを創り上げていく楽しさや喜びを味わうことがいつか出来たなら、そしてそれが生活の糧へと導くことが出来れば「出来る自分」・「未来ある自分」を子供達は自分で必ず発見します。そしてその場に、技術を身につけようと努力する労働者の姿が同じ様に必要です。又、高齢であっても、障害があっても働く意欲を持った大人が働く作業場は、子供達の心を大きくしていきます。

子供達が求めるサークル活動の場、労働者のサークル活動の場が必要です。子供も大人も共に活動し、同じ趣味を生かせる場が生れてきま

す。

そして、あそび場・広い運動場が必要です。釜ヶ崎には4つの公園がありますが、3ヶ所の公園はフェンスで封鎖され、子供達が遊ぶ為難を要求すると「何すんのお」と迷惑そうに言われ、児童公園でありながらも自由に遊ぶことも出来ません。フェンスのない唯一の公園は賭博行為で占領されたり、たむろする大人が多く十分に遊べない状態です。子供も大人も共にあそぶ場が必要です。

こうした社会教育の場を、大人と共に生き学ぶ教育の原点として、青少年の為に新今宮小中学校の跡地を解放すべきです。これ等は、ひいてはまた釜ヶ崎全体の改善と解放の方向性も導き出すものとなることを確信します。

### Ⅲ 大人と共に生きる場

#### — 釜ヶ崎の問題と解放 —

— 昨年、今宮中学と新今宮中学を卒業した2人が朝4時半に起き、西成労働福祉センターより日雇いの仕事に就き、「めっちゃ しんどかった」と誇らしげに帰って来ました。

「土方のおっさん 総理大臣より偉いで。あんなしんどい仕事をやるとるんやな。酒飲むのもわかるわ。」と二言目。

釜ヶ崎の中では、屋間陣を組んで道端や公園で酒を飲んでいる姿、ごろ寝している姿、パチンコ等で遊んでいる姿しか見えないが、それは一面であって、同じ人が張り切り仕事をする偉い人なのだと驚いています。

— 6カ月間も天王寺公園で野室を強いられ、M君は、大きなリヤカーを夜中中、引張り商店街を歩き回って、ダンボールや

廃品を回集する父親の仕事を毎日手伝っていました。時々

「こんな物があったよ。こどもの里でいるやろ。他に良い物があったら持って来たるね」と、衣服や文房具を持って来てくれました。

父親にとっては、この仕事しか出来なくても、子供はそれを一つの仕事として捕え、素直に受け留め、喜んで手伝い、誇りを持って話してくれるのです。

この子供達の仕事への思いを見て、何を感じられるでしょう。私は、日雇いも廃品回集も、一つの職業として捕えている偏見のない子供の心に感動しました。そして日雇い労働に対する偏見が、私の中に根深くあることに気が付き恥しさを覚えました。

現在の日本では、人間の価値や評価はどんな企業に属しているかという外面的要素によってなされています。その人の持っている人格や思想は、評価の対象になりにくいのです。大企業で働く人と中小企業で働く人とは囲りの評価が違います。だから、よい(?)評価を得る為には大企業に就職せねばなりません。その為に有名大学への合格率が高い高校へ行かねばならず、受験戦争が学校の主な内容となっています。こう見ると、日雇いの仕事はどの企業にも属さず、実際その労働力が日本の社会・経済上必要とされ、重要なものであっても、その評価は無に等しいです。大人の中にある日雇い労働者に対する偏見、差別は、こゝに理由があることは明らかです。

「勉強せんと あんなおっちゃんになるで。」と親をはじめ教師からも度々聞かれます。当然の言葉のように話しています。しかし、これは人格を無視した、人を差別している恐ろしい言葉です。

「今日 仕事の帰り電車に乗って恥しかったのう。」と2人で話し合っている若者にその理由を尋ねると、

「じろじろ みんなが見よってん。」という返事でした。土方の仕事をして服が汚れるのは当然のことなのに、汚い人に近づくな。日雇い労働者は怖いし、価値の低い人間だという偏見が、じろじろ見させているのです。

大人の吐いた言葉や囲りの人の視線は、子供達に何を与えているのでしょうか。素直な子供の心に、陰りと歪みを生じさせ、偏見を植えつけている以外、何も与えてはいないのです。

こんなことがありました。

— 母親蒸死に父子して心痛め、病身でありながら酒に溺れる今は亡き父と生活していた12才のHちゃんが、道端で苦しんでしゃがんでいるおばさんを見つけました。彼女はためらわずに声をかけました。

「おばさん、大丈夫? すぐに救急車を呼んであげるわね。」側を通った警察官に泣きながら頼んだのですが、

「そんなの ほっといたらいいよ。」という冷たい返事に、

「このおばさんが死んだら、あんた等のせいで。」と叫びました。あまりにも澄んだ子供の心に警察官も人間として恥たのか救急車を呼びました。車の来る間、Hちゃんは、おばさんの手をしっかりと握り泣いていました。

釜ヶ崎には、ややこしい人間関係の中で生まれ、傷つき悩み育っている子が多くいます。人の弱さも感じ知っています。そして、人間のいろいろな姿を見えています。酔っぱらっている姿、けんかをしている姿、おこっている姿、人を助けている姿、やさしい姿、泣いている姿、寂しい姿等を知っています。人のいたみを自分のい

たみとして捕え、感じる心が萎れているのです。だから、またとても激しいです。人間を、裸の人間を見ることが出来るのです。しかし、他の人は、釜ヶ崎の大人達の一面しか見る機会がなく、偏見を大きくしていつているのです。

事例の中に見られる子供の中にある本物の人間らしさを見ていくと、何が釜ヶ崎の問題なのかがよく解ります。それは、囲りの人間、大人の日雇い労働者に対する見方、価値観にあります。つまり、偏見と管理社会から生まれる競争意識やエリート意識と、受身な消費社会によって人間の心の中に植えつけられた「他人の価値を引き下げることによって、自分の価値を立証しようとしている心」即ち、優越感、裏返せば人を差別している大人自身の現実の姿が問題なのです。釜ヶ崎の問題は、実は差別する側に問題があり、差別する側の問題なのです。

子供は、大人の生きざまを横目で見て、あるものは吸収し、あるものは拒否しながら成長しています。「他人の価値を引き下げることによって、自分の価値を立証しようとしている」大人の姿は、子供達に大人に対する不信感をつらせているのです。そして、この大人の姿の、子供達の心に怠惰や分裂、しらけを持ち込み、子供達の心を知らず知らずの内に触れているのです。戦争よりも目に見えないもっと恐ろしい破壊を、子供の心に植えつけているのです。この現れが、横浜市寿町の中学生による労働者虐殺事件です。

また、釜ヶ崎は在日朝鮮人や部落問題とも深く関わっています。強制連行され、炭鉱で働いていたが、閉鎖によって職を失った人々は、身分社会の中でいつも切り捨てられ、新しい職を見つけれずに釜ヶ崎にやって来ました。

また、他の仕事をしてきた人々も、人間らしさ故に、社会の中で受け入れられず、落胆した

り、挫折して釜ヶ崎にやって来ました。多くは、この釜ヶ崎の地でしか生きる場を求める事が出来ないでいます。日雇いの仕事「けたおち」といわれる仕事しか出来ない、「しゃーないなァ」と思っている心の問題があります。

以上、考察して来た様に、釜ヶ崎の問題は差別する側にあり、また、釜ヶ崎に生きる人々の心の傷にあるならば、釜ヶ崎の解放に向って、私達は、何か出来るのでしょうか。それは街をきれいにするとか、ドヤを新しくするとかいった環境整備の類のものではありません。

まず、第1に自己の中にある偏見の問題と対決し、偏見を取り除こうと努力する事、取り除くことです。

- ・人間の価値や評価を学歴や企業名によってしているのではないか。
- ・いつも他人を引きおろして、自分の立場を主張しようとしていないか。
- ・裸の人間を見ることが出来、受け入れることが出来るか。
- ・何故、釜ヶ崎をこわいと思うのか。
- ・何故、労働者をこわいと思うのか。
- ・小さい子供達が1人で下校しているのに、人格形成を助けている大人、教師が集団下校をしないと帰路につけない怖さは、どこから生じているのか。

等、1つ1つの問題と向かい合い、自己の中にある偏見の問題を解明することです。

第2に、「土方のおっさん、総理大臣より偉いで。」と感じ、土方仕事に誇りを感じた若者達に、

「そうか、りっぱなドカチンになれよ。」と答えることです。この若者達にはりっぱなドカチンになれる様な教育をする事です。設計図も読める様なドカチンに育てていくことです。

この様な考えは、一般社会からは「おかしい」と反論されそうです。しかし、現在の日本の社会は、いかに日雇労働をさげすんでいくかが、すばらしいことになっており、その為に受験競争が起っている現実を見れば、「おかしい」と思う方がおかしいのであって、そんな考え方は明らかにまちがいのです。

第3に、釜ヶ崎でしか生きられない、「しゃーないから土方をしてるんや。」という大人達、労働者が、額に汗して働く時、その姿にふれ、若者達が知った驚きと、労働者への尊敬の心をその労働者自身に知らせる事です。そして、若者達が土方仕事に誇りを持ち、りっぱなドカチンとして生きようとする様を、その労働者に知らせる事です。

「土方のおっさん 総理大臣より偉いで。」

あんなしんどいことやとるんやな。

酒のむのも わかるわ。」

この若者達の労働者への尊敬の言葉を、労働者が直接耳にし、誇りを持って土方仕事をする若者達の姿を見ることによって、きっと労働者は励まされ、また自分を問い直し、そして、自己の労働に対する誇りを感じ、新しい自分で、ドカチンをしながら生きていってくれるにちがひありません。

この新しい人間関係 — 若者達と労働者の出会い — が、釜ヶ崎解放への大きな鍵なのです。だからこそ、今私達は、この出会いの場を保障しなければなりません。新今宮小中学校の跡地は、若者達と労働者の出会いの場、交流の場として解放されるべきです。

## Ⅱ 署名運動への願い

釜ヶ崎に於て、幼児から青少年の真の成長、自己実現を助ける方法は、家族の生活の場の保障と社会教育の場の保障にあります。

そして、釜ヶ崎の解放は、若者達と労働者の出会いの場の保障にあります。

これらの保障の場が、新今宮小中学校跡地に課せられた新しい教育課題 — 新しい人間関係 — なのです。

私達は、これらの保障を実現させる第1歩として、新今宮小中学校の跡地利用についての署

名運動をはじめようとしています。

この競争社会にあって、健気に人間らしく生きている釜ヶ崎の子供の心と姿に見習い、自己を転向する努力を惜しまず、本当の勇気を奮い起こして、正しいことが何かを見きわめ、それを遂行していく大人になってほしいという願いが、署名運動の背後にあります。

是非、ご理解の上、ご協力くださいますようお願いいたします。

釜ヶ崎の先生達へ

「公園であそべれん。」

釜ヶ崎小中学校の子供たちの声

釜ヶ崎の先生達へ、この公園を子供たちの遊び場として使わせてほしいです。子供たちは毎日公園で遊ぶのが大好きです。先生達も一緒に遊んでほしいです。

釜ヶ崎の先生達へ、この公園を子供たちの遊び場として使わせてほしいです。子供たちは毎日公園で遊ぶのが大好きです。先生達も一緒に遊んでほしいです。

釜ヶ崎生活センター

大阪府と交渉を持て

釜ヶ崎生活センターは、釜ヶ崎の子ども達を支援するために設立されました。大阪府と交渉し、釜ヶ崎小中学校跡地を子ども達の遊び場として活用してほしいと訴えています。

釜ヶ崎生活センターの活動内容

- 子ども達の遊び場の確保
- 生活支援
- 教育支援
- 職業訓練

# 「釜ヶ崎」に新しい思想と文化を生み出す 生活共同体の拠点建設を!

「釜ヶ崎」差別と闘う連絡会議(準備会)は一九八三年二月の横浜で  
 部落解放同盟 矢田支部 矢田解放塾々々長 西岡 智

## ① 二つの死の意味するもの

「釜ヶ崎」差別と闘う連絡会議(準備会)は一九八三年二月の横浜で中学生らによる日雇失業労働者三人を虐殺するという衝撃的な事件をきっかけに結成された。人間を「モノ」として見て、「汚い」「町をきれいにしただけだ」という人権感覚の麻痺は、中学生ら自らの「生命の尊厳性」を殺されているといえる。その同じ横浜で今年二月十六日、小学校五年生が高層団地十四階(三六・五米)から飛びおり自殺をした。「紙がくばられた/みんなシーンとなった/テスト戦争の始まりだ/」(中略)テスト戦争は人生を委ねる苦しい戦争」と時にかく感性豊かな子であった。「学校を破産させたら、

先生もいなくなる」という子どもらしい発想を口にし、友達が便所の石けん水を廊下にまき散らした。

担任教師は、その友達らの行為のきつかけとなったのが、「この子の言葉である」ときびしく反省を求めた。幼い魂が何を求め、何を叫んでいるのか、それはなぜかということを考えず、「生意気だった」「私の手におえなかった」という教師の独断が、一つの生命を抹殺したのだ。パンを求めている子に、石を与えているのだ。私たち大人は、自らの精神の荒廃が、子どもの精神を荒廃させているという自覚をせまられている事件である。

## ② 「釜ヶ崎」差別を逆転させる発想を!

「釜ヶ崎」は「浮浪者」の街とし

く知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである。とのべている。釜ヶ崎の口雇労働者の心情も同じものがある筈だ。この人間性への叫びに、どう表現していく力をつけるのか。差別と偏見にまけない主体をつくり、差別と偏見の根元をたち切っていく施策が問われている。

## ③ アル中の労働者を尊敬する子ども

「子どもの里」での話である。「今年今宮中学と新今宮中学を卒業した二人が、朝四時半に起き、西成労働

て、差別と偏見でみられてきた被差別部落と重なり合う一面をもっている。「釜ヶ崎」の生活体験を文学創造のバネにしている黒岩重吾でも

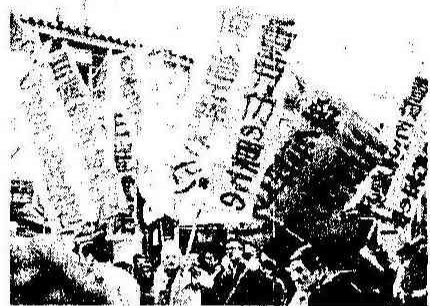
「動物園前で地下鉄を降りた二人は飛田商店街に出た。まだ昼になったばかりなのに夫婦が立ち、地下足袋の労働者が赤い顔でうろついている。ごさを敷いた浮浪者が身体をえびのように曲げて寝ていた。…中略…一杯飲屋は昼なにかの客が入り、騒々しい。仕事にあふれたり、さばった連中が果まっていたのだ。彼等は仕事がないとただ酒を飲み、金が余ると女を賣う:中略:将来どうするつもりだろう。と考えてしまふ。自分の将来について何も考えない人間の気持が正明には理解できない」(さらば星座六巻の下、六四頁集英

福祉センターより日雇いの仕事に就き、「めっちゃ しんどかった。」と誇らしげに帰って来た」という。そして「土方のおっさん、総理大臣より偉いで、あんなしんどい事やっどるんやな、酒飲むのもわかるわ」と語ったという。

アル中の親父や大人がなぜそうなるのか。資本の重圧の中で失業を余儀なくされ、闘うにすべなく、酒にまぎらわさざるを得ない悲しみ。一人ではどうすることもできず、さりとて閉結するには妙のような孤立した社会—この心の闇に想をはせてくやしさを共有して、いきどおりに転化させていける子どもが育っているというのである。釜ヶ崎に育っているこの子どもと大人の共生・連帯の中に「明日」が見える力をつけていく芽があるといえよう。

## ④ 「釜ヶ崎」差別解放の総合計画の第一歩

部落解放運動は、部落を「解放の町」「教育の町」にするため部落解放総合計画を樹立し、部落大衆と連



帯の力で、行政を動かし、教育、労働、住宅などの生活環境をかえ、街づくりをおしすすめる。一定の成果をおさめつつある。この教訓を生かして「釜ヶ崎」解放のための総合計画を樹立 実現の運動を、住民が中心となって起す必要がある。その第一歩として、新今宮小・中学校跡を、釜ヶ崎の住民労働者、子どもたちの新しい共同体形成の拠点として活用していくべきである。住民に開放されたセンターとして事業予算もつけ運用されるべきである。

多くの芸能人を輩出した天王寺の芸人村は釜ヶ崎にある。ここてつちかった生活の底辺からの笑いと哀感、庶民文化の根っこであった。新今宮小・中学校の跡地が、新しい人間観と教育観、豊かな感性をつくり出す共同体の拠点として生れ変わってこそ、この小・中学校をつくった先人の志を発展させるものと確信する。二十一世紀にむけ、発想の転換をはかってすべての教習を結果し、釜ヶ崎差別をなくしていく施策を打ち出し、実現させていこうではありませんか。  
 (一九八六年三月号「新大阪」)

釜ヶ崎生活センターを求めて —釜ヶ崎子ども実態調査報告—
発行：1986年12月15日
発行所：新今宮小中学校跡地利用を考える会
大阪市住之江区浜西1-2-8 住吉グリーンハイツ201号 大阪市教職員組合南大阪支部気付
定価：500円